日本最大の犯罪組織である公安警察と公調を告発する！

公安の本当の手口

公安の全面情報開示をすれば犯罪組織と変わらない実態が明らかになります。次の犠牲者はあなたです。公安（公安警察と公安調査庁）は国家権力による犯罪者集団です。
（佐野利昌氏のブログより）

公安（公安警察と公安調査庁）の本当の手口　［公安の本当の手口］

公安のわかりやすい仕事ぶりの一部を紹介しましょう。
家宅侵入やカギをかけた車へ侵入し、あるはずのない長い髪の毛や印刷物等を車内に置き、被害者に必ずわかるようなかたちで痕跡を残し、協力者達による猿芝居や仄めかしに

より「侵入した事を告知する」やり方は以前書いたが、窃盗目的でない事自体、珍しいことで通常は起こり得ない事なのです。

又、協力者達は被害者に対して行っている事の本当の意味を知らされていないので、ただ単なるパーツとして演技等の協力をしているだけなのです。私にしつこく纏わりついている公安がやっている犯罪に結果的に協力しているとの認識はないはずである。

だいたい公安(公安警察や公安調査庁)が犯罪を行っているなどとは、いくら説明したところで、信じる人間はまずいないだろう。公安警察ならありうる話だが、一行政機関の公安調査庁なら驚天動地のことである。

下劣な演技に積極的に協力するような人間は「想像力の欠如した」人間でかつ「権威」や「権力」を有難がる人種なので「国家権力による犯罪に加担している事」を理解させる事は難しいだろう。協力者達は、公安がマークする「危険な人物」なのだから「公安が干渉するのは当然だ」とさえ思っているのかもしれない。

なにせ「想像力が欠如している」ので、目先の表面的なことしか頭に入らず、権力の裏の顔や、謀略、捏造、いじめや不正の隠蔽等が日々のニュースで報じられても、権力や大企業の権威を疑うことなくそのまま受け入れ、物事の善悪や何が真実かを自分の頭脳で考える事ができないのです。

これから紹介する手口は、単なる車内への不法侵入、家宅侵入と違いその悪質さが理解できるだろう。私が間違いないと確認できたのだけで、5年ぐらい前から一昨年までで4回やられているのだが、もしかしたら私が気付かないだけでもっとやられているのかも知れない。

薄野の大型駐車場で1度、狸小路界隈の2つのパーキングビルでそれぞれ1度、苫小牧の大衆温泉で1度である。

パーキングビルの場合たいてい7階に止めるのだが、何時間か後に戻ると盗難警報装置付きの普通小型車が無くなっているのである、青くなって捜すとなぜか5階にあるのです。一瞬私の勘違いだと自分に言い聞かせるのだが、7階に停めるかもしくは混んでる場合、上階ほど空いているので下の階に停めることなどありえないのです。

あちこちの階を捜し歩き、なぜか下の階で見つけてとりあえずホッとするのだが、次には怒りがこみ上げてくるのです。そしてそんな時には必ず隣や向かいの乗用車の中ではニヤけて携帯電話をかけてる会社員風の男がいるのである。

後で想い出すのだがたしかエレベーターに乗って降りる時に決まって誰か証人となるような人間と乗り合わせる。しかし香水撒き散らしているミニスカの若いねえちゃんや好青年風の若い男は証人などではなく実は公安の協力者なのである。嘘の証言で嵌めるための人員を配置し乗り合わせるのである。

3件とも下の階に車を移動させてるのは、見かけ上は潰れず反抗的な私を「上から下に引きずり下ろす」という暗示の意味のつもりかもしれない(実質的にはとうの昔に潰され、既に社会的に抹殺されているのだが。)。
公安ヤクザは巧妙で陰険な工作をするので見破るのには熟練?の匠の技が必要である。

私も公安、公安と騒いでいるが、公安の私服の警官や公安調査局の職員らしいのが私の前に直接姿を現す事はめったになく、ほとんどが間抜けな顔の協力者ばかりである。しかし、このような場合の直接の実行犯は公安部の私服の警官か調査局の職員の可能性が高い。監視カメラのビデオを再生して犯罪の事実を確認しようとすれば、最寄りの交番の警察官立ち会いのもとでなければ再生しないことになっている。公安がこんなわかりやすい証拠を残す筈はない。
公安の下劣なバカどもの用意周到な連絡のもとに行われるであろう立証できない犯罪を、刑事警察の真面目な警察官の立ち会いの元で立証しなければならないという、笑うしかないのだが私の置かれている現実でもある。
2件は監視カメラが正常に作動(ただし常時ではない)していたが時間の無駄なのはわかっているので、3件とも私の方から無視してその場を立ち去った。

「手口はこうだ。」

盗難警報装置を解除して、ドアを開け、エンジンをかけて7階から5階に車を移動し、盗難警報装置を再びセットして立ち去り、デッチ上げた「危険人物」の対応を観察するため近くの車に何名かの人員を配置しておくのである。
リモコンキーの場合特定の周波数の電波を飛ばして施錠、解錠をするのだが、メーカーの説明では同じ車種でも何十万通りの周波数が違い誤作動は有り得ないそうだ。
「周波数の解読」の線で考えてみたが、何のことはない同じキーを私の車の担当ディーラーから手に入れたようだ。

まるで嘲笑うかのように、何ヶ月後に転勤になった支店長に「偶然」出会わされたので確信を得た事である。北署の前でＳ出元事務長に「偶然」出会わされたのと同じやり方である。この件を境に支店に私が訪れた際の雰囲気、工場長や社員の動揺した態度でも確信した事だ。

これらの空気を察するには体験者にしかわからない事であり、「馬鹿(病気)」と「事実」が紙一重の場面である。読む人に「どちら」と受け取られるかわからないが、私としてはどうしてもここまで書かなければならない事である。公安というヤクザは病気と思わせるような状況を創り上げて嵌めるので注意が必要である。

私に精神的にダメージを与えるようなインパクトのある犯罪を行った時には、「力」を誇示するように露骨に、あからさまに、執拗に、公安(公安警察と公安調査庁)という人間のクズは「その事」をうすら笑いを浮かべた「協力者を使って」私に告知してくるのだ。事前の連絡、打ち合わせによる「計画的な偶然」は、組織的なストーカーにおいては基本的な手口である。

苫小牧のケースではさらに悪質である。私の義父は手助けがなければ歩けない不自由な体になったのだが月に二、三度、「Ｎの湯」に入るのをささやかな楽しみとしていた。

私が付き添って世話をするのだが、義父のからだを洗い終え、自分のからだを洗っている最中に、館内の放送で私の車の呼出しがあり、邪魔をしているので至急どかしてくれというのだ。

思い当たる節はないのだが、とりあえず大急ぎで身体を洗い流し、義父には動かず待つように念押しして、急いで服を着て駐車場にいってみると、私の車が白い軽トラックの前を堂々と塞ぎ、確かに出れないでいるのだ。下品な顔の「この野郎」もグルだと直感したが、義父のことを考えて、胸ぐらをつかまえるのを思いとどまった。急いで浴場に戻らなければならない。幸い何事もなかったが「認知」も少し入った義父は不安げにイスに座っていた。

広い駐車場なので他人の車が出られないように停めることなどあり得ないことであり、私の生涯で一度もないことである。どんな人間でも白線を引いた駐車スペースがあるのに、他人の車の前に駐車はしないだろう。連中も相当イラだっているのか大胆である。

なぜここまでやられなければならないのか。こんなことをどこができるのか。事前の準備と連絡により人員の手配を誰が指示できるのか。

公安の人間のクズたちは、私がレッテルと違う良い人間であっては困るのである。
病気や危険人物という何十年も貼ってきたレッテルどうりの人間でなければならず、活動の大義名分がなくなるのでこういう悪どいことも平然とやるのである。たしか前回来た時ロッカーの近くの人物に話しかけられた際に（こいつも協力者である）、政治の話題になり国家権力の悪行をチラッとだが話したことを思い出した。
公安の犯罪行為や悪事を「平和でのんきに暮らすおめでたい善良な市民」に拡散されては困るのだろう。

私が泡だらけになって身体を洗っている最中の最も動きのとれない、取り込み中のタイミングを狙って、浴場のあちこちに配置している協力者が合図して館内放送させるのだろう。フロントも指示されて協力していることになるのだが、こういう手の込んだ大掛かりな事を主導的にできるのは、どういう立場の組織か。

さすがに、黙ってる訳にはいかないので帰りに、男性責任者に無駄を承知で公安関係の事情を説明したが、返ってきた言葉が「**共産党の方ですか。**」
冗談じゃない、私のように日常生活まで干渉されて、掻き回されている人間は日共の党員には一人もいないはずだ。

協力者になっているであろうこの「想像力の欠如した」責任者と、水掛け論の押し問答になるので早々に切り上げたのだが、「公安対共産党」という戦前、戦中の実際に酷い弾圧のあった時代の対立構図のイメージがいまだに一般的に浸透していることをあらためて感じた。
今はもうこの大衆温泉に、義父と行く必要もなくなったのだが、今年になって用があって一度だけ妻と行った際に受付の女性従業員から渡された男湯のロッカーの鍵の番号が、昼間のすいていた時間なのに「110」だと。
公安という人間のくず組織は、危険でもない人物にわかりやすいが悪質な犯罪を、まるで「見せしめ」のように実行し、狙いを定めた弱い立場のターゲットに一生涯付纏い、何

でもできる事を誇示し、何十年も前から強大な権力を背景にそういう仕事をやってきたのである。「N の湯」の例のように無防備な弱者を陰険なやり方で容赦なく叩きつぶしにかかるのだ。

たとえば思想的な理由でマークされてる人物が、たとえ転向して一般市民になったとしても、公安がリストから削除することは絶対にない。「世界の坂本」や自民党の「塩崎恭久」のように社会的に影響力のある立場になった場合は、昔に中核派に属していてもマークすることはない。中核派でどの程度なのかそもそもマークされるような活動ををしていたのか。

あの時代は誰もがデモぐらい参加しただろうし、学園紛争では角材もって暴れていた者も特に珍しくない時代である。

後年成功したときのほとんどの成功者は、若い時は過激派に属していたとか、ワルだったとかの一種の「自慢話」を必ずするものである。

今もリアルタイムに追いかけまわされている過激派なら、のんきに自慢話などしていられないだろう。人間のいやらしいところである。

ホントのところは私もわからないがね。

公安は卑怯な腐った組織(工作機関だから当然か。)なので本物の大金持ちや社会的な立場にあり人脈も豊富な人物に対しては目を付けてストーカーをすることはない。

自分達が調べられて問題になり立場が危うくなるおそれがあるので、決して近づかないないのである。

「シゴト」のやり易い一度捕まえたカモを手放すことはなく、死ぬまで付き纏うのだ。政権が変わろうが地震が起きようが、放射能まみれになろうがたとえ Give up しようが、ターゲットが「消滅」するまで問答無用で関わってくるのである。

公安というヤクザ者に「生やさしい常識」を期待していると、最後にはケツの毛までむしり取られて棺桶に入れられるだろう。

警察車両を大量に納入しているトヨタや日産や他のメーカーにとって警察は宣伝効果もある超優良大口顧客でもある。危険人物であることを告げ、警察手帳を提示して同じ周波数のキーを手に入れる事など苦も無くできるだろう。警察手帳の権威を疑う一般市民はほとんどいない筈だ。若い娘のスカートの中に危険物がないかとカメラ付携帯で捜査している警官がいたって、やはり「警察」は黄門様の印籠のように絶大な力があるのです。

公安調査庁がどの程度できるのかわからないが、公安警察なら簡単にできるはずだ。

警視庁公安部と公安調査庁は確執があって仲が良くないとかよく言われているが、私は全く信じていない。まったく同じ危険団体、危険人物をターゲットにしているのだから情報交換や足りない部分を補てんし合って活動しているはずである。
そうでなければ国の治安を守れる(これも怪しいのだが)はずもなくターゲットが同じなのに二つの組織がバラバラに勝手に動いているなどとは到底有り得ないことである。

この二つの秘密組織に関しては自分達に不利な都合の悪い情報がでてくるはずもなく仲の悪いふりをして情報を共有していなかったとか、例えば凶悪な事件を防げなかった言い訳にしているのである。この公安クズ組織は連続企業爆破事件や地下鉄サリン事件など防げるはずの凶悪事件を防いだことは一度もなく、わざと泳がせて事件を起こさせ国民の「憎悪」を煽り、テロと戦う公安を演出して公安組織の存在感を際立たせ組織の存続も安泰なのである。

刑事事件では令状がなければ家宅捜索をできない。しかし公安警察は実際には捜査令状などいらないのである。表向き厳正に手続に則ってやっている事案を時々世間向けに見せるのだが、スパイ活動や工作活動をするのに一々裁判所にお伺いを立てるバカはいません。嘘をつき、人を騙すのが工作活動です。

人権に配慮した工作活動などあり得ません。バレなければ人権や法律などどうでもいいのです。証拠が残らないように最大限の配慮をし、口止めをするのです。組織的なストーカーは公安の工作活動の一環であり、デッチ上げた嘘の内容によっては、右だろうが左だろうがあらゆる分野の人々を協力者にできます。
公安ネタで講演して飯食ってるあの人たちも協力者かもね。
警察権力の対極にいると思ってた元狐ツキの宮崎氏が公安調査庁のスパイをやっていたというのだから椅子からずり落ちそうである。公安にかかれば何でもアリということだな。
由緒正しい有名な「新右翼」には、公安のパフォーマンスの意味合いもあり、令状をとって家宅捜索を金属探知機まで使って派手にやるのだろう。
しかし、これは公安の表向きの顔でしかない。本当の公安の手口はもっと陰湿で下品で下劣な犯罪であり、町内の隣近所をまきこんでバレないよう被害者を極悪人にデッチ上げて警察の権威をちらつかせ、もっと巧妙に実行するはずだ。

『強盗や殺人犯を追う刑事警察と違い、公安警察はきわめて政治的な存在だ。彼等は「起こった事件」を追うのではない。「起こりそうな事件」を予防する。また、「事件を起こしそうな人間」を見張る。

つまり、人間の内面、人間の心を覗きこんで監視しているのだ。』

「公安警察の手口」

公安警察の本質はそのとおりである。しかし信じられないかもしれないが公安警察や公安調査庁の本当の手口は、人間の内面、心を覗き更にそのうえ「心の中にまで土足で踏み込み」物心両面からその人間を破壊するのである。

さしずめ「事件を起こしそうな人間」とは公安によれば私のような人間になるのだろうがとんでもないでっち上げで私は嵌められたのである。

だいたい事件を起こしそうな人間をどのような基準で決めるのか。今の世の中をふつうに見渡しても事件を起こしそうな連中は山ほどいるだろう。監視されるべきは彼らであり私ではない。

公安のように本当は何をやってるかわからない胡散臭い秘密の組織にとっては適度に事件が起こってくれなければ公安部も困るのである。たまに情報を漏らして公安部の仕事ぶりをアピールしても、やはり国民の一部から「怪しまれている」組織なので存在感をアピールできる機会を常に窺っているのである。

こんなことに神経を使ってる組織が凶悪事件を防げるはずもない。

絶対に防ぐという立場ではないので事件が起こってからでもどちらでもいいのである。かえって事件が起こってある程度犠牲者が出た後に、おもむろに登場し国民の憎悪を増幅させてから解決させた方が公安の有難みが増すというものである。お気楽な組織である。

やるべきことをやらず、やらなくてもいいことをやっている公安のヨタ者組織がいる限り無差別な殺傷事件のような犯罪が増えることはあっても減ることはないはずだ。

わたしに生涯に亘って付き纏って人権侵害をやりプライバシーを侵害し人権蹂躙をやり盗撮(実はもっと酷いことをやっている)をやり盗聴をやり・・を照射しつづけ住居侵入、車への侵入をやり、町内ではでっちあげの嘘をばら撒き、まわりの人間を協力者にして監視状態にしている。公安(公安警察と公安調査庁)とは犯罪のデパートであり、税金を使った日本最大の広域犯罪組織であり、暴力団より性質(たち)が悪い人間のクズ組織なのである。

外事3課の流出情報のような調査・捜査活動を公安が行っているのも事実かもしれないが。公安(主に公安調査庁が主導しているかもしれないが)は私のような者にも付き纏って、人間性を疑うような下劣でバカげた極めて悪質なストーカー犯罪を税金を使って行っているのも又厳然とした事実である。

私への組織的なストーカー活動に関しては暇人が税金と時間を無駄遣いしているとしか表現できないような公安の仕事ぶりである。

わかりやすい例として取り上げたのだが日常生活の様々な場面での干渉は過去30年に亘って普通に行われてきた。これら4件の犯罪を被害者にも周りの一般市民にもバレないように実行し、確実に成功させるために、特に苫小牧のケースでは、実行にあたって朝の出発段階から車の追尾をはじめ相当数の税金無駄遣いの人員を配置し、手分けして携帯電話で連絡を取り合いながら私や車近辺の「監視」もいつもよりも増して用意周到に行っているはずである。

後で想い出すのだが、実家に着いた際、すぐ近くに社名入りのバンが停車していて気にはなっていたが、「そのようである」。

監視カメラが作動している２件の場合は、証拠など残せないので、事後の対応や証拠隠滅をも抜かりなくやっているはずである。私の憶測でいろいろな方法が推察できるが、大掛かりだが目立たぬよう水面下で行う、窃盗目的ではないがプロの窃盗団もできないこんな芸当を誰がどうやって何のためにやるのか、素人があれこれ推察するよりも当の公安関係者に説明させることで最も「正確な答え」が出るのです。

これを説明できるのは札幌市の北海道公安調査局と北海道警警備部公安課の「担当公安さん」、別名「人間のクズ」だけである。

［公安の本当の手口］

公安のヤクザ者たちが何をやるか、具体的でわかりやすいそのいやがらせの一部を紹介しよう。車の盗難防止の電子キーの解除、施錠はすでに紹介したが公安は国家権力を背景に活動している窃盗集団のような組織である。公安が関与した場合鍵や錠などはほとんど意味をなさない。

ターゲットによって使い分けているのだろうが、実際に物をとることは私の場合は少なかった。しかし本人にだけわかるように、証拠にならない「侵入した」ことを示す「痕跡」は残す。

以前「高校の卒業アルバム」をＴ高時代にアパートの２階の「公安のドブネズミ」に盗まれてしまったことがある。私の不在の時に「家宅捜索」をして情報を収集されていた形跡もあった。今はPCやスマホを使ったセキュリティが発達しているので住居侵入はある程度は防ぐことが可能だろう。

ただし、ヤル気でやっている公的機関はそれを破る方法を必ず持っているはずだ。
単純な窃盗目的なら単純に侵入を防止することが一番に心がけることである。

「防ぐこと」も必要だがしかし本当の問題は、こんな状況におかれていることなのであり、根本的な解決にはならないのである。

暴力団よりタチの悪いこの組織は、あらゆる技術を悪用しあらゆる方策を駆使して私に関わってくる。

公安がその気になって本気でやる場合、裁判所の令状など必要ないし、本人に提示などするわけがない。これが「**公安の本当の手口**」である。

元CIAのスノーデンが暴露して問題になったが、何千万件という携帯電話の会話が普通に盗聴されている。たまたま表面化しただけでこれが現実であり、裏ではもっと酷いことが行われているはずだ。

公安警察が誰もがわかるように、ビデオカメラ数台担いで「他人の敷地でビラをポストにいれた」などと裁判沙汰になっていたり、公開で「家宅捜索」をするのは公安のパフォーマンスの意味合いが強い。これ以上は今は言わないが。

公安調査庁に泳がされていたといわれる**オウムの菊地直子**は、かなり前から監視されていたとの話もあり不在時に住居にも侵入されていたそうである。ただしこの手の話は「ガセネタ」の可能性もあるが、私の体験ではあり得ることだと思う。

組織存続が盤石の状態になったので「用済み」になったオウム事件の菊池、高橋克也、平田信らをバタバタとイモずる式に逮捕されるように仕向けたのではないか。

なにせ、最近では「**日本版 CIA**」を目指しているとか。

20 年前のオウム事件のときにはとても考えられない展開である。

公安部と公安調査庁はまったく同じターゲットに対してほとんど同じような活動をしている。「逮捕権」などの違いはあるものの、同じような機関は二つもいらない。

東西冷戦終結後には、なおさら不要な行政機関になっていて人員削減や組織を縮小しながらのリストラ対象機関のリストに挙がっていた。

ところがオウム事件を利用して息を吹き返し、さらにへ理屈つけて「アレフ」や「ひかりの輪」を存続させ、自らの組織も存続させたのである。

窃盗目的ならすぐに刑事事件になるのだが、公安による幼稚な工作活動はむしろもっと悪質である。幼稚と書いたが実は本当にすごいストーカー活動、工作活動なのである。

公安のチンピラたちによる暇人組織が実行しなければ絶対にあり得ないことである。24 時間体制(遠隔監視を含む)で張り付く「**プロの暇人たち**」でなければ絶対に不可能なことである。

彼らは権力という目に見えない力を誇示していやがらせをし、私たちを弄んでいるのである。公安という国家機関が「嘘」と自分たちの活動にとって「都合のよい理由」を大げさにねつ造し、特に私に精神的な苦痛を 30 年以上与え続けているのである。

「国家機関が一個人にそんなことやるわけがない」と思う方がいるかもしれないが、事実である。実はやられている当の私が一番驚いているのだが、まさに驚天動地とはこのことである。まさか私の周りで公安が活動していたなどとは微塵も疑わず、想像を絶することだったのである。

仮に 100 歩譲ってどんな理由があるにせよ、国家機関が一個人に 30 年以上にわたって生活のあらゆる場面で干渉し、プライバシーを侵害して辱め、私の人権をズタズタに蹂躙し、人を侮辱し、名誉を棄損し私の生活や人格を破壊するような活動が許されるのか。

偶然を装ったストーカー活動は日常的におこなわれているが、最大の特徴は公安の指示により刑事告訴されるような証拠を残さないように周到かつ狡猾に行われることである。そんなことができるか、公安がそんなことをするかと疑う人もいるだろう。

たとえば危険人物による破壊活動を防止するためとか言って危険を煽り、捜査の一環として「警察手帳」を提示して協力させることなど簡単なことだろう。

警察ならば「捜査上の秘密」で組織的にストーカー活動に協力している協力者たちを完璧に口止めできるはずである。組織的なストーカー活動は被害者に甚大な精神的苦痛を与えているのだが、国家機関が関与し口止めしているので、協力者の「証言」を得るのもほぼ不可能であろう。

「証拠」の確保云々を言う人もいる。気持はわかるが公安という「証拠のプロ」はあらゆる手段を使って阻止してくるので一筋縄ではいかず、第三者が考えるようには、事は単純には運ばない。

2014 年 1 月 20 日 20 時 20 分頃モエレ「たまゆらの杜」にて。

下足箱のロッカーは「靴」を入れて 100 円を入れて鍵をかける。帰る際解錠したら 100 円が戻ってくるしくみである。下足箱のカギは「着替えのロッカー」にいれ「着替えのロッカーの鍵」は自分の手首にはめる。

[「銭湯に行った際」19 時 15 分]

私は 725 に靴を入れ 100 円を入れカギをかけた。番号を確認してカギをポケットに入れる。妻は 725 の真下の 726 に靴を入れ 100 円を入れてカギをかけた。

100 円を入れなければカギはかからない。

二人で施錠と番号を確認してから受付でそれぞれの着替えのロッカーキーを受け取る。

[「銭湯の帰りの際」20 時 20 分ごろ]

受付にロッカーキーをそれぞれ返す。私が 725 の下足ロッカーをカギであけると 100 円が戻り、見知らぬヨレヨレの男物の黒靴がでてくる。私は意味がわからず目が点になっていると、妻が 726 をカギで開ける。

100 円が戻り、妻の下足ロッカーにはなぜか私の靴が入っている。事態の意味がわからずポカンとしている妻。そして妻は自分の靴がないのに気付きあわてて捜す。そしてその真下の鍵がささったままで使われていない 727 をたまたま開けてみた。

私たち二人には最初からまったく身に覚えのない、キーがついたままで使われていない 727 から妻の靴が出てきたのである。

上下で隣接する 725 と 726 に入れたことはふたりで最初に確認済みのことであり、もとより 727 は私たちとは全く関係のない下足ロッカーである。

窃盗目的なら合鍵を作り技術的に可能なことで「小さな事件」だろうと思う。

しかしこれは違う。衆人環視のもとで事前の「根回し」を含め、あからさまにこれほどのことを可能にするのは公安でなければどういう組織、団体か。そもそもなぜこんなことをする必要があるのか。妻を直接に巻き込んだのも今回が初めてである。

苫小牧の「なごみの湯」では大胆にも私の車を白い軽トラックの前に移動させて、体を洗っている泡だらけの最もタイミングのいい(わるい)ときを狙って呼び出した。

後日、ガラカラにすいていたのに「偶然にも」110 のロッカーキーを渡されたものである。公安の指示をうけた無知な上司の命で受付のバカ女がやったことだと思うが、公安は弱い立場の人間には、いつでも「からかう」ほどの余裕があり自信満々である。

私に対しての一連のことは窃盗や傷害などの単純な刑事事件よりも悪質であると思うのだが、皆さんはどう思うだろう。ニヤけて指示を出している国家機関である公安のチンピラどもを八つ裂きにしてやりたいほどの悔しさや怒りをわかっていただけるだろうか。

札幌市北区を舞台にしてこのようなことを計画し、そして実際に実行できるのは私には道警公安課と道公安調査局の二つの公安しか思い浮かばないのだが「異議があれば」私の方に連絡をください。

30 年以上前の南の K からの経緯を公安を含む全ての関係者、学校関係者、全ての偶然の協力者たちへの詳細な調査、事情聴取をし、検証をしていただきたい。そして私が何をしたのか公安がいままで私に何をしてきたのかの厳密で公正な調査をお願いしたい。